

保屋野良治君の逝去を悼む

櫻田喜貢穂（7組）

宮原豊君（9組）から10月13日、突然に、保屋野良治君（9組）の訃報がメールで届いた。内科医で健康管理を怠らず、我々の健康状態を気にかけてくれていた保屋野君が、こんなにも早く逝ってしまうなんてにはわかには信じられない。これが運命というものなのか！

もはやご冥福をお祈りするほかない。

保屋野君は、私の亡父の塩田中学時代の教え子である。

この10月10日は、親父の誕生日で、生きていればちょうど100歳である。その夜、私は、事務所で親父のことを書いたエッセイに手を入れながら、親父を偲んでいた。

親父は、私が中学生のころ新設されたばかりの塩田中学に勤めていて、国語と美術を教えていた。親父が自宅で国語のテストの採点しているときである。見るつもりはなかったが、採点を終えたばかりの答案を見てしまったことがある。たまたま眼にした答案は、美しい文字でとてつもなく高得点だった。だから私は、瞬時にその高得点者の名前を記憶した。「保屋野良治」という名前だった。

高校に入ると、同期に保屋野君がいることはわかっていたが、同じ講座になったことがなく、部活も違ったので、高校時代にはまったく接触がなかった。

保屋野君と初めて言葉を交わしたのは、初めて出席した銀座での同期会だったと記憶している。50歳ころだった。牧野泉君（9組）に誘われた池袋のスナックでの二次会は、9組が中心で、西村賢治君、武澤（保屋野）美佐子さん、柄沢則夫君、土屋雄三君のほかに保屋野君がいて、それに7組の安川荘太郎君と私というメンバーだった。何を話したのか覚えていないが、保屋野君は私と親父の関係を知っていた。帰省の折に、保屋野君と出会ったことを親父に報告すると、親父は保屋野君を鮮明に覚えていて、とても喜んでくれた。

思えばこの二次会が9組の面々（とりわけ西村君、牧野君）との関わりのはじまりであり、その後は同期会や9組+α（2組の上原昇君と私）の会のたびに保屋野君と顔を合わせるようになり、彼の経営する会社の法律相談に乗ることもあった。いつも静かで穏やかな笑みを浮かべていたが、頻繁に患者の死と接する臨床医はなかなかしんどいものようであった。だから彼は、産業医と医師・看護師の派遣会社という二足の草鞋（二刀流）を選択したのだろう。そして、おそらく彼は二足の草鞋を脱ぐ暇もないまま、彼岸に渡っていった。此岸で休む暇がないまま逝くのは保屋野君らしいと言えなくはないが、あちらではゆっくり休んでください。そして、私の亡父に会いましたらよろしくお伝えください。

合掌

（2024年10月14日記）